

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 7 月 7 日現在

機関番号：16102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02704

研究課題名(和文) 資質・能力の多様性と学際性を視点にした地理歴史授業の国際協働開発と教師への普及

研究課題名(英文) International collaborative development and dissemination to teachers of geography and history lessons from the perspective of diversity and interdisciplinarity of qualities and abilities

研究代表者

伊藤 直之 (ITO, Naoyuki)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：20390453

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、地理歴史教育において見られる、異なる「資質・能力」観、具体的には地理や歴史ならではの「多様性」に立つ資質・能力と、地理および歴史が併せ持つような「学際性」に立つ「資質・能力」という観点から、地理歴史教育において望まれる「資質・能力」について構造化を図る。そして、教科教育学研究者と地理学・歴史学研究者とが学際連携し、海外の研究協力者を交えて対話を重ねながら、日本の学校教師が集うワークショップを開催して、構造化された「資質・能力」にもとづく授業プランを開発・批評し合い、その成果を最大の受益者となるべき生徒に還元することを目的とする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義として、第一に、コンピテンシーの育成の世界的な潮流を受けるなかで、資質・能力のもつ「学際性」や「多様性」という観点から、地理歴史教育がどのような資質・能力の育成のために再編されようとしているかを、各研究者の得意とする分野・領域の事例を通して具体的に描くことができた点がある。第二に、国内外の研究者と学校教師の協働によって、資質・能力の育成を見据えた地理歴史授業のあり方について議論し、具体的な授業モデルを開発し、実践できた点が挙げられる。第三に、地理学・歴史学の研究者との協働によって、資質・能力の育成を見据えた地理歴史教育の“研究のあり方”について展望を示すことができた点が挙げられる。

研究成果の概要(英文)：This study aims to structure the 'qualities and abilities' seen in geography and history education from the perspective of the 'qualities and abilities' that stand in the 'diversity' of geography and history with an emphasis on individuality, and the 'qualities and abilities' that stand in the 'interdisciplinarity' that geography and history share. Then, through interdisciplinary collaboration between subject pedagogics researchers and geography/history researchers, and through dialogue with overseas research collaborators, a workshop will be held for school teachers in Japan to develop and critique lesson plans based on the structured 'qualities and abilities' and to return the results to students, who should be the greatest beneficiaries of these plans. The aim is to return the results to the students, who should be the greatest beneficiaries.

研究分野：教科教育学

キーワード：資質・能力 多様性 学際性

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初は、学習指導要領の改訂が進行中であり、今次改訂におけるキーワードは「資質・能力」であることに注目が集まっていた。日本および諸外国の教育動向を俯瞰すると、「資質・能力」にはさまざまなとらえ方が散見された。一つ目は、個別の教科によらず、通教科的で汎用性の高い「資質・能力」である。OECDの「キー・コンピテンシー」をはじめ、国立教育政策研究所の「21世紀型能力」などが該当する。これらに呼応して、日本の学校教師の主要な関心が知識・理解よりも思考力や判断力に推移し、静態的な授業よりも「アクティブラーニング」が望まれるようになっていた。

他方、上記とは対照的なものとして、個別教科の固有性に立脚して、地理や歴史ならではの知識に由来する「資質・能力」を主張する諸団体がある。典型的な動向として、イギリスの知識社会学者マイケル・ヤングの唱える「強力な学問的知識(Powerful Disciplinary Knowledge)」論がある。それを拠り所にして、地理教育学者ランバートらが、地理だからこそできる能力の再定義とそれにもとづく授業開発を推進する「ジオ・ケイパビリティーズ(Geo-capabilities)」プロジェクトを展開している。彼らは上述のコンピテンシーとは一線を画して、教科で育むべき「資質・能力」の源泉を知識に求め、子どもの「潜在能力(capabilities)」への寄与という観点から教科のあり方を検討している。今後は、我が国をはじめアジアからの参画が要請・模索されており、地理教育に続いて歴史教育への発展が計画されている。さらに、上記2つの中間的な位置にある学際的な「資質・能力」として、アメリカ合衆国の「C3フレームワーク」がある。大学進学(College)・就職(Career)・市民生活(Civic life)の3つに役立つために、公民、経済、地理、歴史の各科目が各々の領域を超えた学際的なコラボを通して、社会科として育むべき「資質・能力」のスタンダードを打ち立てた。これらの動向は、上記の通教科的・汎用的なコンピテンシーを重視するグローバルな教育動向の高まりのなかで、各教科の領域を守ろうとするヨーロッパ型、アメリカ型の対抗運動とも解される。そして、この過程で重要なことは、そもそも地理教育や歴史教育を、あるいは社会科教育を形作る枠組みとして、子どもに育成したい「資質・能力」は何なのかを明示するという点である。従来のコンテンツ・ベースの考え方からの脱却が要求されている。「資質・能力」の育成とコンテンツの枠組みの関係は、ともすれば教科教育学と社会諸科学の分断・対立を生み出してきたが、これらの両立・調和を想像していかなければならないことも紛れのない事実である。このことは、教科教育学、特に社会系教科に関する研究は、教科教育学研究者間だけで取り組むものではなく、地理学や歴史学などの社会諸科学の研究者との議論や協働作業によって進展していく必要があることを意味している。本研究の着想に至った経緯は、「資質・能力」に対する見解が、我が国の教科教育学者のなかでも異なることに関心を有していたからである。一般に、地理学や歴史学研究に由来する教科教育学者は、地理ならではの歴史ならではの多様性を重視した「資質・育成」論をもつが、教育学の一部門としての教科教育学を修めた学者は、地理および歴史の学際的な側面を生かした融合的な「資質・能力」論を説く傾向にある。研究代表者は、上述のような問題関心にもとづき、異なるキャリアをもつ教科教育学研究者と社会諸科学研究者からなる研究体制を組織し、多様な「資質・能力」論を引き出すべく、本研究を構想した。

2. 研究の目的

本研究は、地理歴史教育において異なる「資質・能力」観、具体的には地理や歴史の多様性に立つ「資質・能力」と、地理と歴史の学際性に立つ「資質・能力」というという観点から、地理歴史教育において望まれる「資質・能力」について構造化を図る。そして、バックグラウンドやキャリアを異にする教科教育学研究者と地理学・歴史学研究者とが学際連携し、海外の研究協力者を交えて対話を重ねながら、我が国の学校教師が集うワークショップを開催して、構造化された「資質・能力」にもとづく

授業プランを開発し、その成果を最大の受益者となるべき生徒に還元することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、「資質・能力」に対する見解の相違を視点として、地理や歴史の多様性を重視した「資質・能力」と、地理と歴史の学際性を重視した「資質・能力」とについて、その理念型や具体像の検討を試みる。学問的基盤の経歴を異にする教科教育学・地理学・歴史学研究者からなる研究体制下での考察をふまえて、各々の「資質・能力」論に立つ地理歴史授業デザインを形作る。その後、試作された授業デザインは、諸外国の研究者との「資質・能力」論および地理歴史授業の具体像についての共通性や相違点を議論するための土台となる。最終的に、国内外の研究者と学校教師を招いて、異なる「資質・能力」観に立つ地理歴史授業づくりワークショップを開催し、具体化された授業は参加者間およびウェブ上を介して共有され、実践へと浸透していくことをねらいとしている。

なかでも、本研究の方法として、以下の三点の協働性を重視している。

- (1) 異なる「資質・能力」観を持つ教科教育学者と、地理学・歴史学研究者との協働によって、「資質・能力」の多様性を認めつつも、学際的な視野から構造化を図ろうとする点【協働Ⅰ】
- (2) 諸外国において同様の関心を有する研究協力者と協働的な関係構築を図り、単なる国際比較調査にとどまらずに、日本における地理歴史授業の実態と改善の方向性を発信し、研究成果を国際的にシェアしようとする点【協働Ⅱ】
- (3) 日本の各地において授業改善に意欲的な学校教師を招いた授業づくりワークショップを開催し、本研究の成果を学校教師ならびに明日の授業を学ぶ生徒たちにダイレクトに還元しようとする点【協働Ⅲ】

上述のような本研究の方法に関わる特色・独創的な点を図式的に示したものが図1である。

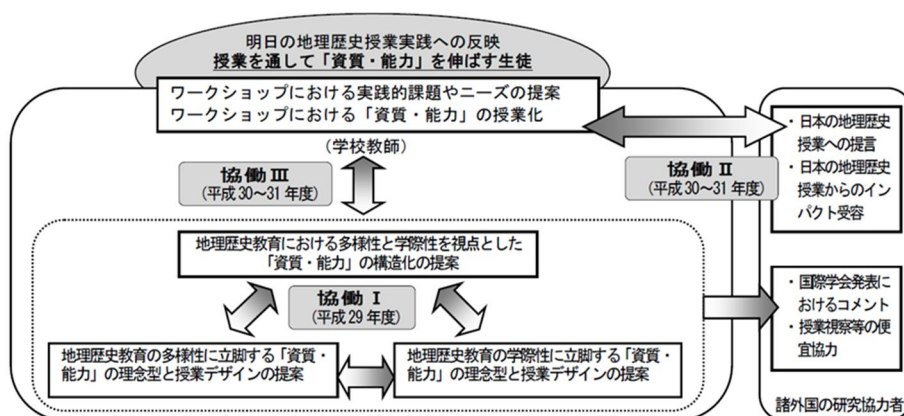


図1 本研究における協働的体制

4. 研究成果

本研究の成果については、地理歴史教育で育成すべき資質・能力を理念的に整理・体系化し、各理念の相克について、諸外国における特徴的なカリキュラムや授業実践を通して例証することに加え、国内外の学校教師との協働的な授業開発と実践を通して生徒の資質・能力の向上を促進することができたことである。成果の具体については、新たに科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「学術図書」補助事業名「地理歴史授業の国際協働開発と教師への普及 資質・能力の多様性と学際性を視点として」（番号：21HP5195）の交付を受けて書籍を刊行し、読者によるさらなる普及を通して、日本の教科教育学における資質・能力研究の深化・発展に寄与することへとつながっている。

本研究では、地理歴史教育における資質・能力像として、3つの異なる教科観（教科ごとに独自性・多様性をもつ・教科は学際性をもつ・教科は統合される）に基づいて、下掲の表1

のように類型化した。そして、ディシプリン文脈での体系的な知識提供を通じて能力の潜在的な醸成を期待するケイパビリティ論と、アウトカムによる体現された能力を看取るコンピテンシー論に大別し、個別教科の独自性を重視する地理ケイパビリティや地理科としての資質・能力、地理と歴史の横断を求める地理歴史科としての資質・能力、公民科をも含めた社会認識教科としての資質・能力、実生活の文脈をも包括したより広範な教科横断や社会教育との連携を促す超教科的で汎用的な資質・能力とに類別した。その位相を示したものが図2である。

本研究の意義として、第一に、コンピテンシーの育成の世界的な潮流を受け、学校における地理歴史教育で「資質・能力」育成の実質化が要請されているなかで、資質・能力のもつ「学際性」や「多様性」という観点から、地理教育や歴史教育、そして、社会科教育や通教科がどのような資質・能力の育成のために再編されようとしているかを、各研究者の得意とする分野・領域の事例を通して具体的に描くことができた点がある。

表1 地理歴史教育における資質・能力の類型

教科観	資質・能力の理念型	資質・能力の具体例
教科は独自性・多様性をもつべき	「地理」「歴史」のディシプリンに根ざしたケイパビリティ	力強い学問的知識(能力の潜在的な姿)
	「地理科」「歴史科」としての資質・能力	読図能力、歴史解釈能力など
教科は学際性をもつべき	社会科・地理歴史科としての資質・能力	社会形成力、価値判断能力など
教科は統合されるべき	教科を超えて育む汎用的な資質・能力	問題解決能力、批判的思考力など

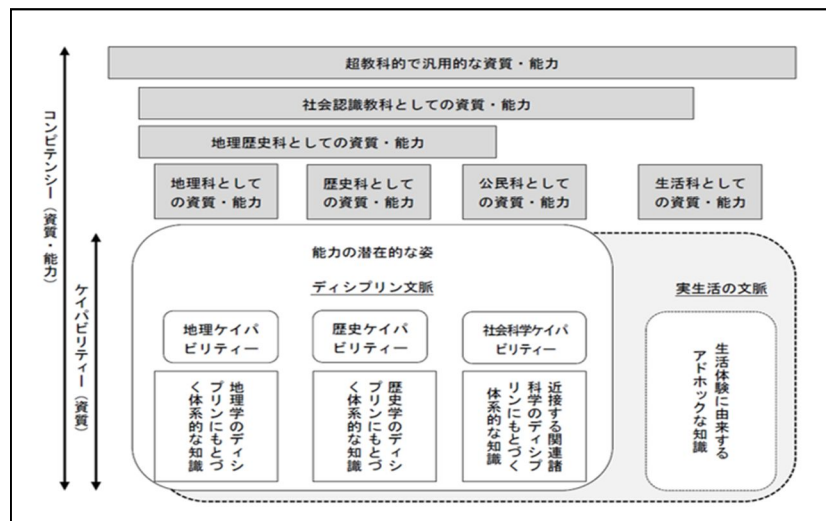


図2 地理歴史教育における資質・能力像の位相

第二に、国内外の研究者と学校教師の協働によって、資質・能力の育成を見据えた地理歴史授業のあり方について議論し、具体的な授業モデルを開発し、実践できた点が挙げられる。なかでも、2018年8月に鳴門教育大学にて、各地から中学校・高等学校教師が集い、イギリスの地理教科書著者ジョン・ウィドゥソン氏を招いてワークショップを開催し、探究学習について知見を得たことや、2019年8月にドイツにおける歴史ならではのコンピテンシー・モデルを参考にして、新科目「歴史総合」を見据えた授業実践について議論を深め、徳島県内の研究協力者による授業開発への結実と実践を見届けることができたこと、そして、2018年8月にドイツのリーゼマイトナーギムナジウム他において授業を実践し、ドイツの教師とともに授業改善について意見を交わすことができたことは、本研究の特色ともいえる協働的な関係(特に、研究者と学校教師との協働、そして、諸外国の実践者との協働)を駆使したからに他ならない。これまでも、

欧米の著名な研究者の来日による講演などの企画は多々あったが、実践者の来日によるワークショップは数少なかった。実践レベルでの国を超えた邂逅は、学校現場や授業実践への還元をダイレクトに促進するものとなった。

第三に、地理学・歴史学の研究者との協働によって、資質・能力の育成を見据えた地理歴史教育の“研究のあり方”について展望を示すことができた点が挙げられる。その成果は前掲書の「第五部 専門科学からみた資質・能力育成の地理歴史教育」に示す通りである。研究分担者のうち地理学を主専攻とする研究者は、地理教育学者との共著という形で、ドイツの地理教科書分析を通してコンピテンシー育成について解明したが、この研究は地理学から地理教育へと接近するために、専門諸科学の研究者だけでは限界があり、教科教育学の協業が必要であることを示唆している。教科教育学研究における専門諸科学からの越境は、従来でもそれが開かれていたことに変わりはないが、教科教育学がその独自性に固執して各分野の各牙城を守ろうとするあまり、学問の垣根を越えた協業への抵抗があったのではないだろうか。今後は新しい地理歴史教育のパイロット版を示すためのブレイクスルーが求められていくべきであろう。

他方、歴史学を主専攻とする分担者は、単独研究という形式で歴史教育のあり方を論じたが、その見解は明確で、歴史教育は「歴史が持つ特性や歴史（叙述）の多様性という歴史学の基礎」を重視するべきであると説いている。歴史哲学や歴史の本質論を通して、中等歴史教育のあり方を論じるアプローチは、大学における教員養成課程というシステムにおける協業の成果ともいえる。地理学者や歴史学者が説く地理歴史教育の“あり方論”について、教科教育学の研究者は傾聴する必要がある。

本研究が残した課題も多々ある。第一に、資質・能力の育成に舵を切ることについての批判的検討が少なかったことである。国内では、学習指導要領の改訂を受けて、いわゆる「主体的・対話的で深い学び」を促す授業改善という要請から、知識を習得する授業だけでなく、知識を活用する授業への発展が望まれていることは周知の通りである。しかし、コンピテンシーへの傾斜がもたらす問題点として、知識の軽視が危惧されている。コンピテンシーの流行は、ともすれば、本来、学校における教科の教育の礎であった教科ならではの固有性を見過ごし、どの教科でもあてはまる汎用的の高いジェネリック・スキルへの傾斜を導きやすい。スキルの一人歩きは、知識を方略的な次元でとらえ、いわゆる「学び方学習」に終始する恐れがある。

社会科・地理歴史科・公民科における資質・能力とは、知識と結ばれた力だということである。知識を欠いた地理歴史教育はあり得ない。かといって、知識の暗記・定着を図る授業への回帰も問題解決とならない。本研究にとって残された課題として、“資質・能力の育成に寄与するために欠かせない本質的な知識は何か”という問いに対する回答を挙げることができる。これらの点については、引き続きの検討課題としたい。

課題の第二として、ワークショップの運営方式に不慣れで、準備等に不十分な点があったことである。せっかく有益な基調提案を提供していただいたものの、ワークショップで議論すべきテーマの設定に到らない点があった。たしかに、ワークショップは性急な成果を求めるべきものではないが、例えば、ワークショップのテーマ「未来の社会をつくるための教科書の活用方略を考える～社会科における防災学習を例にして～」に象徴されるように、ジョン氏の探究学習に関する基調提案に続いて、ワールド・カフェ形式を採用して、取り組むべき検討課題を教科書や防災学習という文脈と重ねたことは、議論を散逸させ、混乱を招いた一因であった。資質・能力と結ばれた探究学習という文脈で、探究へと向かうための問いについて多様な提案を求めるべきだったかもしれない。この点については、ジョン氏からのコメントからも明らかである。反省事項として受け止め、コロナ禍があけたあかつきには、是非とも、再びジョン氏のような実践家の来日機会を設けて、さらに多くの参加者を募って、充実したワークショップの運営を期したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Kim H., Yamamoto R., Ito N., Shimura T.	4. 巻 29
2. 論文標題 Development of the GeoCapabilities project in Japan: furthering international debate on the GeoCapabilities approach	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Research in Geographical and Environmental Education	6. 最初と最後の頁 244 ~ 259
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/10382046.2020.1749768	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 原田昌博	4. 巻 34
2. 論文標題 ワイマル共和国中・後期の政治的暴力に関する研究の現状	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鳴門教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 217-236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24727/00028114	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 宇都宮明子	4. 巻 2-2
2. 論文標題 歴史意識を育成する歴史教育論に基づいた日本史授業開発：鎌倉時代の単元を事例に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 佐賀大学教育学部研究論文集	6. 最初と最後の頁 19-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 宇都宮明子	4. 巻 42-2
2. 論文標題 社会科学習指導要領におけるアウトカム志向への転換に関する考察 - F U E R歴史意識プロジェクトのコンピテンス・モデルに基づいて -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本教科教育学会誌	6. 最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阪上弘彬・山本隆太	4. 巻 63-7
2. 論文標題 「システム」をカリキュラムの目線からみる - ドイツの場合	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地理	6. 最初と最後の頁 104-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 由井義通	4. 巻 2018年度特別号
2. 論文標題 「地理総合」と「地理探求」で育成する資質・能力	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地理・地図資料	6. 最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井田仁康	4. 巻 65-2
2. 論文標題 「地理総合」の方向性とGIS	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 新地理	6. 最初と最後の頁 83-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田昌博	4. 巻 17
2. 論文標題 教員養成大学で問う「歴史とは何か」 ~ 「初等中等教育実践基礎演習」での実践より ~	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鳴門教育大学授業実践研究	6. 最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宇都宮明子	4. 巻 2-1
2. 論文標題 歴史意識を育成する歴史教育論の構築に関する考察：日独の歴史教育学研究の検討を通して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 佐賀大学教育学部研究論文集	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ペーターガウチ著 原田信之、宇都宮明子訳	4. 巻 29
2. 論文標題 翻訳 コンピテンス志向の歴史授業：ペーター・ガウチ教授初来日記念講演会	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究	6. 最初と最後の頁 227-250
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 阪上弘彬	4. 巻 72-4
2. 論文標題 ドイツ地理教育におけるコンピテンシーの位置づけ - 16州の地理カリキュラムの比較から -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 地理科学	6. 最初と最後の頁 209-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 伊藤直之
2. 発表標題 英国地理教科書における「探究学習」はいかに作られるかーTHIS IS GEPGRAPHYの場合ー
3. 学会等名 日本地理学会春季学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井田仁康
2. 発表標題 中高接続を踏まえた中学校地理的分野、高校地理実践の在り方
3. 学会等名 人文地理学会第42回地理教育研究部会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ida Yoshiyasu
2. 発表標題 Characteristics of the geography curriculum in new course study in Japan
3. 学会等名 IGU-Commission on geographical education（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井田仁康
2. 発表標題 中学校社会地理的分野における防災教育のモデル教科書
3. 学会等名 全国社会科教育学会第67回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ida Yoshiyasu
2. 発表標題 Issue of multicultural education in Japan
3. 学会等名 International Symposium of Multicultural and Education Quality Assurance in the International Perspective（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宇都宮明子
2. 発表標題 スイスドイツ語圏における歴史教師のピリーフ研究に関する考察 - 日本でのピリーフ調査の実施に向けて -
3. 学会等名 社会系教科教育学会第30回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroaki Sakaue
2. 発表標題 Characteristics of Education Sustainable Development in Japanese Geography Education: Focused on a New High School Subject "Comprehensive Geography"
3. 学会等名 The 2019 EUROGEO Annual Meeting and Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshiyasu Ida
2. 発表標題 Moral education and geography education
3. 学会等名 National postdoctoral forum on moral and civic education (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宇都宮明子
2. 発表標題 歴史意識を育成する歴史教育論に基づいた日本史授業開発 - 鎌倉時代の単元を事例に -
3. 学会等名 全国社会科教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宇都宮明子
2. 発表標題 歴史意識を育成する歴史教育論の構築に関する考察 - 日独の歴史教育学研究の考察を通して -
3. 学会等名 日本社会科教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hiroaki Sakaue
2. 発表標題 Trends of Education for Sustainable Development on Geographical Curriculum: Focused on Japan and Germany
3. 学会等名 2017韓国地理環境教育学会夏季学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoshimichi Yui
2. 発表標題 Challenge to GAP in Japanese Education after DESD
3. 学会等名 2017韓国地理環境教育学会夏季学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村田翔・今井貴秀・沖西啓子・阪上弘彬・由井義通
2. 発表標題 初等社会科における地図学習実践の試み
3. 学会等名 2017年度 日本地理教育学会 第67回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊藤直之
2. 発表標題 基調提案：「主体的・対話的で深い学び」を実現する社会科教科書のあり方を考える
3. 学会等名 第34回鳴門社会科教育学会研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 志村喬・永田成文・秋本弘章・KIM Hyunjin・伊藤直之
2. 発表標題 「地理総合」実践に向けた社会系教員対象公開ワークショップ 地理的な見方・考え方を自覚化する地理ケイパビリティ・プロジェクト成果研修材体験
3. 学会等名 2017年度 日本地理教育学会 第67回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 伊藤 直之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 240
3. 書名 地理歴史授業の国際協働開発と教師への普及	

1. 著者名 伊藤直之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 296
3. 書名 地理科地理と市民科地理の教育課程編成論比較研究	

1. 著者名 吉田武男, 井田仁康, 唐木清志	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 200
3. 書名 初等社会科教育	

1. 著者名 井田仁康, 中尾敏朗, 橋本康弘	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日本文教出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 授業が変わる! 新しい中学社会のポイント	

1. 著者名 阪上弘彬	4. 発行年 2018年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 158
3. 書名 ドイツ地理教育改革とESDの展開	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	井田 仁康 (Ida Yoshiyasu) (20203086)	筑波大学・人間系・教授 (12102)	
研究分担者	由井 義通 (Yui Yoshimichi) (80243525)	広島大学・教育学研究科・教授 (15401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	原田 昌博 (Harada Masahiro) (60320032)	鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授 (16102)	
研究分担者	宇都宮 明子 (Utsunomiya Akiko) (40611546)	島根大学・学術研究院教育学系・准教授 (15201)	
研究分担者	山田 秀和 (Yamada Hidekazu) (50400122)	岡山大学・教育学研究科・准教授 (15301)	
研究分担者	田中 伸 (Tanaka Noboru) (70508465)	岐阜大学・教育学部・准教授 (13701)	
研究分担者	阪上 弘彬 (Sakaue Hiroaki) (30791272)	兵庫教育大学・その他部局等・助教 (14503)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 未来の社会をつくるための教科書の活用方略を考える～イギリスと日本の「資質・能力」～	開催年 2018年～2018年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
英国	John Widdowson(Textbook Writer)		
ドイツ	Lise Meitner Gymnasium		